誰一人取り残さない！校内フリースクールF組

～適応するのは子供ではなく学校～

はじめに

文部科学省が実施している「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」において、令和3年度の全国の小中学校の不登校児童生徒は、約24万5千人となり、9年連続の増加となった。岡崎市においても、不登校児童生徒数は年々増加傾向となっており、不登校対策は喫緊かつ最重要課題であることは言うまでもない。

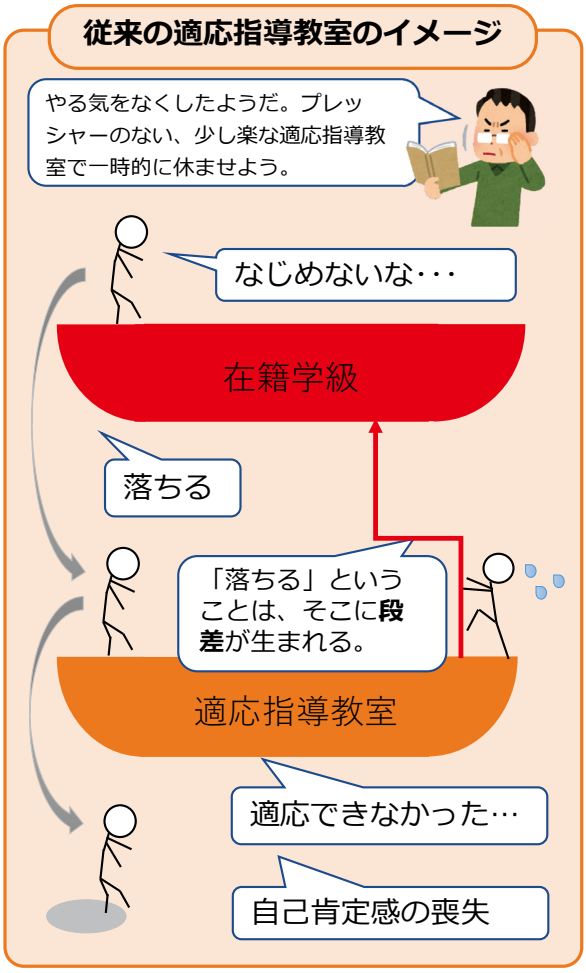
上述の調査において、不登校の要因を問う質問がある。公立小中学校の結果の主たる要因に着目してみると、「友人関係をめぐる問題」は9.7%、「親子の関わり方」8.1%、「生活リズムの乱れ」11.9%などとなっている。その中で、最も高い割合となっているのが「無気力・不安」の50.0%である。では、この「無気力」や「不安」の割合が多いのはなぜか。その問いを学校が自らに向けることが必要であると考える。

本稿では、その問いを自らに向けることで生み出された「校内フリースクールＦ組」（以下、F組）についてまとめた（本市では、「不登校」を「長期欠席」と呼んでおり、本稿でも同様に使用している）。

1．F組設置の経緯

（1） 校内適応指導教室の実態から

長期欠席対策の1つとして、本市では、各校の実情に応じて、校内適応指導教室を設置していた。学校や学級に足が向かなくなった場合、適応指導教室を利用し、在籍学級に戻るためのエネルギーを溜める、一時的に休息する場である。しかし、在籍学級に戻ることを目的としているため、適応指導教室を利用する子供の中には、「在籍学級に適応できなかった」と感じ、「落ちた」という感覚が心のどこかに生まれている現状があった。また、教員の中にも、同じ感覚をもっている者がいたのも事実である。



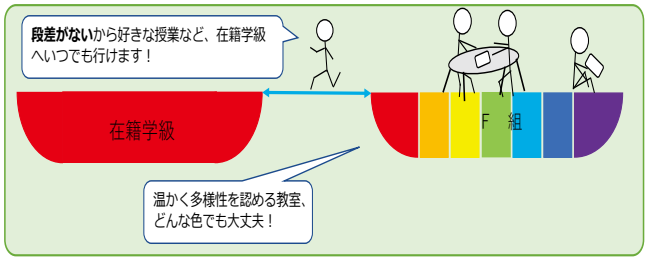
この「落ちた」という感覚が、在籍学級との間に、大きな段差を生み、その段差を乗り越えられない子供は、適応指導教室でも、居づらさを感じ、学校の中に居場所がなくなってしまうといった実態があった。

（2）特性に応じた学びの場を確保するため

誰一人取り残すことなく個別最適な学びを保障していくことが学校教育において重要であることは言うまでもない。これは、いわゆる「不登校」の状態にある子供に

対しても同様である。そのための効果的な支援をしていくために、「不登校」を登校できない子ととらえるのではなく、「特性に応じた学びの場が必要な子」としてとらえ直すなど、これまでの価値観を大きく変えていく必要がある。また、それと同時に、その特性に応じた多様な学びの場を、学校が確保していく必要があると考えた。

この2点に共通する「子供を学校に適応させるのではなく、学校が子供に適応する」という考え方を根底に、これまでの校内適応指導教室を発展的に解消しながら、温かく多様性を認める教室であり、そして、全ての人が他の学級と同じ1つの学級と認める教室となるF組の設置に至った。



2．F組の理念

F組という教室を設置しただけでは、学校が子供たちにとって安心できる場所にはならず、学校にかかわるすべての人の考えを変える必要がある。そこで、次に示した「F組の理念」を掲げた。この理念を、子供・保護者・教職員に浸透させていくことが、F組に通う子供の心理的安全性を担保し、学校に居場所を作ることにつながると考えた。

<F組の理念>

①子供が学校に適応するのではなく、学校が子供に適応する。
②通常学級と同じ、1つの学級として扱う。
③信頼の厚い教員を担任として配置し、多様性を受け入れられる学級を作る。
④支援員を配置し、いつでも温かく迎える体制を作る。
⑤教室復帰を目的とするのではなく、社会的自立を目指す。

この理念のもと、温かく、多様性が認められるF組で過ごした子供たちは、学校内で安心できる居場所を見つけ、自分のよさを表出し始めると考える。そして、F組担任、支援員の温かい支えにより、子供たちは心のエネルギーを高めていくものと考える。

3．F組の活動の実際

「Free・Fly・Future」の頭文字を取ったF組。この言葉のとおり、F組では、生徒に自己決定の場を与え、安心した環境の中で楽しく学び、社会的自立へとつなげている。そのF組の取組の一端を紹介する。

（1）これまでの教室にない空気感の創出

F組に通っている生徒の中には、人目を気にする生徒もいるため、教室の場所については、動線を考慮し、外から入りやすい教室を使用している。教室内については、丸みのある机やソファーなどを設置し、心安らぐ空間となるよう環境づくりをしている。また、人とのかかわりが苦手な生徒もいることから、パーティションを用いて個別学習スペースを設置している。

←A中学校の教室風景

個別学習スペース→

（2）　1日の活動を自分で決める

F組での過ごし方については、自分で1日の時間割やスケジュールを決める。自分のペースで学習に取り組めるようにするとともに、自己決定の場を与える。その取組を、担任や支援員が支え、生徒が小さな成功体験を積み重ねていくことで、自己肯定感を高めることにつなげている。なお、活動の時間（実技教科やコミュニケーションの時間など）を、各校の実情に応じて、1日の時間割の中に組み込んでいる。

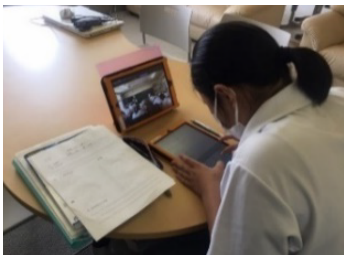
（3）個に応じた学習支援

①全教職員による支援

F組担任や支援員が、生徒の学習内容を見取り、学習支援を行う。また、他の教員が自由にF組に足を運び、他の学級同様、全教職員でF組の子供の学びを支える体制がとられている。

②オンラインでの授業参加

授業に参加したいと思ってはいるものの、集団での活動においてとまどいを感じている生徒もいる。そのような生徒が授業に参加できるよう、F組の教室にて、オンラインで在籍学級の授業に参加することも可能となっている。また、他学年へのオンライン参加も可能であり、学び直しを行う生徒もいる。



③タブレット端末の活用

一人一台のタブレット端末には、小学校から中学校の学習を網羅している学習ソフトが入っている。学習面でつまづきを感じている生徒は、自分の理解度に応じて、学び直しができるようになっている。

（4）技能教科の活動を取り入れる

活動の時間として、卓球やバドミントン、調理実習などの技能教科を学ぶ機会を多く取り入れている。F組の仲間と一緒に活動したり、作業したりすることで自然とコミュニケーションが取れる良さがある。また、子供自身が、自分の「強み」や「やりたいこと」を探すことにもつながっている。

（5）コミュニケーションの場の設定

子供同士のつながり、子供と教師との信頼関係を構築していくために、カードゲームやボードゲームなどを通して、コミュニケーションを図る機会を設けている。

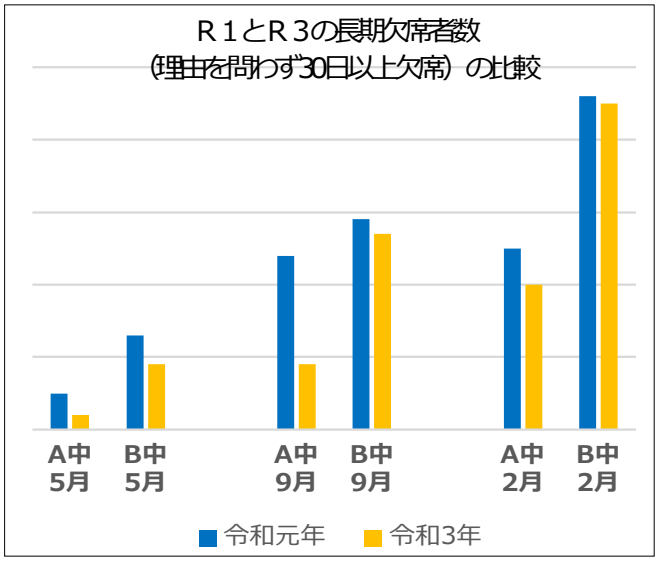
（6）他者との交流の機会の設定

地域の方を講師として招いたり、F組で職場体験を行ったりするなど、様々な人と出会わせ、生徒の世界観を広げるための取組を積極的に行っている。ある中学校では、学区内の保育園で実習を行った。一緒に歌ったり、絵を描いたり、園児とともに活動をする中で、生徒の表情が自然と笑顔になっていく様子が見られた。人とのコミュニケーションを取ることが得意ではない生徒Aは、この体験において、園児のために、ピアノを弾いたり、園児が喜ぶような制作物を作ったりするなど、相手を意識して活動する姿が見られた。生徒Aの笑顔から自己有用感を高めている様子が伺えた。このことからも、他者との交流の機会の設定は、生徒の世界観を広げ、自立につながる支援であると考える。

4．F組設置の成果

（1）設置校の長期欠席者の様子から

F組設置校の長期欠席者の新規発生率は、未設置校に比べ、抑制が図られている。下のグラフは、令和3年度にF組を新規設置した5校のうちA・B中学校の2校の、令和元年度と令和3年度の長期欠席者数を表したグラフである。

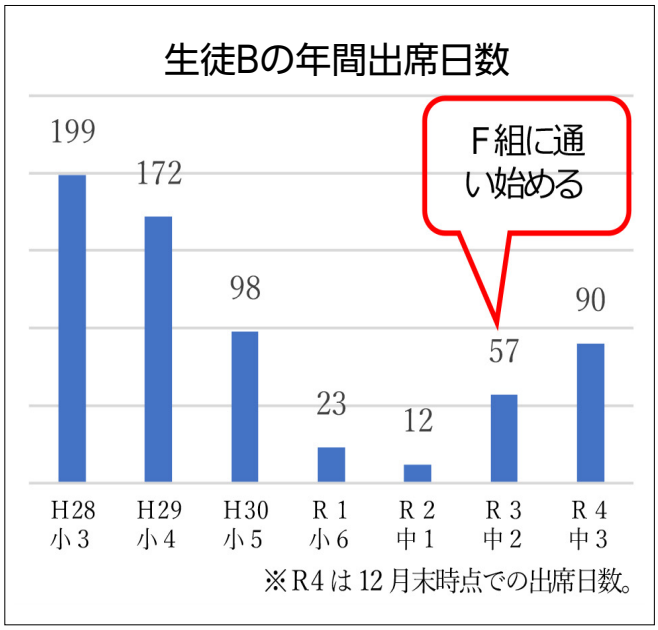


前頁のグラフから分かるように、A・B中学校とも令和元年度より長期欠席者数の減少が見られた。長期欠席生徒にとって、F組が学校内で居場所となり、学校に登校できるようになったことと合わせ、教員の意識の変化も進み始めた結果であるととらえている。

また、令和4年度現在設置されている14校における、F組利用者数の合計は、約 300 人である。何かしらの理由で学校や学級に足が向かない生徒たちが、F組という場が居場所となり、学校という壁を乗り越え、社会的自立に向けて歩みを進めている。

(2) 生徒 B の変化から

下のグラフは、F組に通っている生徒 B の学年ごとの年間出席日数である。



生徒 B は、小学校4年生から欠席日数が増え始め、学年が進むにつれて、徐々に登校日数が減少していった。小学校の状況をうけ、中学校では、生徒 B が入学した後、在籍学級担任、F組担任、支援員が、家庭訪問を何度も繰り返し信頼関係を築いていった。その結果、中学校2年生時よりF組に少しずつ通うようになった。F組担任・支援員は、寄り添う中で、生徒 B が興味を感じるようなことを探り、さまざまな手立てを講じた。その中で、ギターとの出会いが、生徒 B を大きく動き始めることにつながった。学校に登校したときには、F 組担任や支援員が、ギター練習を一緒になって行うことで、少しずつ心のエネルギーを高めていき、学校に行く目的をもつようになってきた。人との関わりが苦手であった生徒Bであったが、3年生時には、文化祭において全校生徒の前で演奏を行うまでになった。

(3) 教職員の意識の変化から

F組に足を運ぶと、上の写真のような光景を目にする。教職員がF組に顔を出し、生徒と何気ない会話を楽しんでいる温かな空気が流れている。学年・学級に関係なく、生徒一人一人を皆で支える体制が、自然と生み出されている。

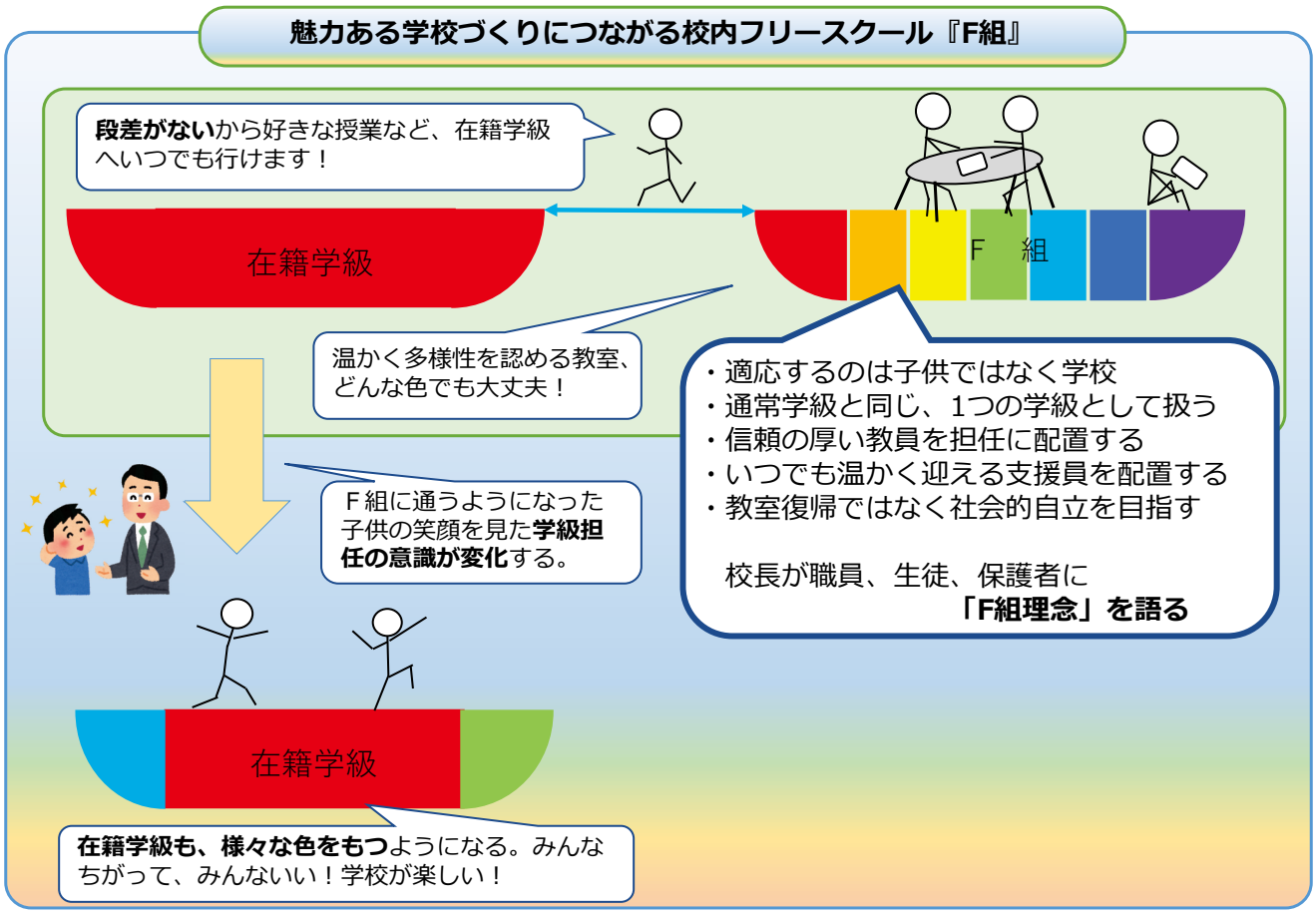
F組設置校の2年目の若手教員が、このような話をした。「学校に来させようという目的で接するのではなく、まずは、子供に寄り添い、思いを共有することがどれだけ大切か、F組に通う生徒と接する中で、自分自身が学んでいる。」この若手教員は、他の教室でも、この思いで生徒と向き合うようになってきていると語る。

・些細なことから「寄り添う」
・やろうとしたことを認める
・一歩踏み出したことを認める
・できたことを褒める

F組の生徒たちとのかかわりは、子供たちを「受け入れ、包み込む」という深い児童生徒理解のあり方につながる教職員の意識の変化につながっている。

5. おわりに

令和2年度に校内フリースクール F 組を設置し、本年度で3年目となった。次頁のイメージ図のように、校内フリースクールF組が、長期欠席者の減少だけでなく、「子

供を学校に適応させるのではなく、学校が子供に適応する」という価値観の変化を、教職員にもたらすことを期待している。そのことが、子供たちが「学校が楽しい!」と感じる魅力ある学校につながっていくと考える。

「多様性を受け入れる」というF組の理念が、ごく自然な当たり前のこととなり、未来を生きる子供たちの将来が、明るく、そして温かいものとなるよう、今学校にできることを、今後も進めていきたいと考える。